

世界の中の日本2014

堀内 修

■ 来日公演

まだ2011年の影響が残っているのか、それとも他の理由なのか、2014年には外国の歌劇場の日本公演は少なかった。ヨーロッパの一流歌劇場がいくつも日本公演を行ない、華やかな話題となっていたころとは様変りした。

オペラ・ファンの注目を集めたのはローマ歌劇場の日本公演だった。上演したのは《ナブッコ》と《シモン・ボッカネグラ》で、どちらもヴェルディの作品で、どちらもリッカルド・ムーティが指揮した。

ミラノのスカラ座のような不動の名声があるわけではなく、しかも前回の日本公演の評判があまり芳しいものでなかったローマ歌劇場だが、2014年5月には世界の一流歌劇場のようによに迎えられた。ムーティのせいだ。芸術監督あるいは音楽監督ではなく、終身名誉指揮者ということになっていたが、実質的に歌劇場を率いていたのは、スカラ座の芸術監督だったころ以来、久しぶりにイタリアの歌劇場のリーダーとなったムーティだ。名声、実力、そして人気のどれをとっても文句のないムーティが、ローマを特別な歌劇場にしていた。

かつてムーティの評価を作った作品である《ナブッコ》が期待されたが、以前は故クラウディオ・アバドの名と結びついていた《シモン・ボッカネグラ》を指揮するのも話題になった。

万全とまではいかなかったが、《シモン・ボッカネグラ》も《ナブッコ》も、大変に質

の高い上演となった。この年の日本のオペラ上演の中でも屈指の出来ばえだった。演劇的な舞台が主流になっている中で、2つのオペラともに大変保守的な演出だったし、歌手の陣容にもスターが揃えられているわけではない。それでも上演の水準が高くなったのは、やはり指揮者ムーティの力が大きかったのだろう。上演後も指揮者に対する拍手が歌手たちをしのいでいた。

勢いを失っていると伝えられるイタリアの歌劇場の中で、ローマ歌劇場は例外的に好調であるといわれ、日本公演がそれを証明することになった。だが日本公演を終えた後のローマ歌劇場は、順風満帆とはいかなかったようだ。財政問題が表に出て、ムーティが辞任することになったからだ。新しいシーズンをなんとか開けられたのだが、一時は歌劇場の閉鎖までささやかれるほどだった。日本公演が、ローマのオペラの束の間の輝きだったのかもしれない。

現在のイタリアの状況を反映してなのか、スター歌手が勢揃いというわけではなかったし、主要歌手の交代もあった。それでも歌手の水準は悪くなかった。ジョルジョ・ペテアンのシモン、ドミトリー・ベロセルスキーのフィエスコ、フランチェスコ・メーリのガブリエーレなどを揃えた《シモン・ボッカネグラ》は、アンサンブルとして勝れていたし、ルカ・サルシのナブッコやタチアナ・セルジャンのアビガイッレなどの《ナブッコ》もイタリア一流の歌劇場にふさわしい出来ばえだったのではないかな。

ローマ歌劇場はヴェルディの国の首都が、過去にもそうだったように、オペラの上演で

も時に輝かしい成果を挙げるのを、見事に誇ったのだった。

日本のオペラ・ファンのイタリア・オペラ好みは、このローマ歌劇場の2つのヴェルディの熱狂によって、これまで以上に表面化した。ヴェルディ生誕201年の年だったのは、ヴェルディの国と日本との時間差だったのだろう。

図抜けたパリ・オペラ座のほかにも、フランスにはすぐれた上演を行う歌劇場がある。フランスの国立リヨン歌劇場は2014年、日本でめざましい成果を挙げた。

大野和士は2005年に、当時音楽監督を務めていたブリュッセルのモネ劇場を率いて日本公演を行なっている。その時のデイヴィッド・マクヴィカー演出による《ドン・ジョヴァンニ》は、ヨーロッパの先端的歌劇場の面目を発揮して日本のオペラ・ファンを魅了した。そして9年後にリヨンの歌劇場の首席指揮者として日本に披露したのが、ロラン・ペリー演出の《ホフマン物語》だった。

ペリー演出の舞台は、新国立劇場や松本のサイトウ・キネン・フェスティバルなどで、いくつも上演されていて、珍しいわけではない。しかもこれは10年以上前の、決して新しいとはいえない舞台だった。それでも幻想的な美しさをたたえた舞台美術を生かし、このオペラの暗い官能性を引き出した上演は、出色の《ホフマン物語》を実現させた。

もちろんその特徴を引き出した主役は、指揮者だった。すでに新国立劇場の《トリスタンとイゾルデ》で、日本でのオペラ指揮者としての評価を確実にしている大野和士だが、この《ホフマン物語》は、その評価をさらに高めるものだった。

この上演の大きな特徴は、ヒロインの4役をひとりで歌うことにあった。演技派でもあるパトリツィア・チョーフィが歌ったことも

あり、ひとりの女性のさまざまな面という、別に新しいわけでもなく、珍しいわけでもない解釈が、生きたものになった。そして恋愛オペラとしての《ホフマン物語》が浮かび上った。

ホフマンを歌ったジョン・オズボーンは、明るく軽やかな声で、フランス・オペラの軽やかさを出すのに一役買っていたし、ロラン・アルパロの4役もうまくいっていた。

いくつかのエピソードが構成されるというより、ひとつの物語のいくつかの面になっている上演だった。さまざまなやり方があるのが《ホフマン物語》というオペラだが、リヨンの上演は明確にひとつの視点が示された、筋の通ったものだった。

リヨン歌劇場の《ホフマン物語》は、いまこの歌劇場がどのような上演を行なっていて、大野和士が首席指揮者としてどう関わっているかを、はっきり示す公演となった。日本の歌劇場の公演とは違う感覚を持った、洗練されたオペラが、日本のオペラ・ファンに刺激を与えることになったのではないだろうか。

スロヴェニアの小都市マリボールの歌劇場は、2007年に初めて日本公演を行ない、《ラクメ》を上演している。2014年はなんと年に2回、日本公演を行なっている。

6～7月に上演したのは《カルメン》だった。フィリップ・アルロー演出の舞台で、公演によってはヴェッセリーナ・カサロヴァがタイトル・ロールを歌う。マリボールの歌劇場は小規模なアンサンブルなのだが、日本公演では時にスター歌手を加えるという方法をとる。さらに重要なのは地方公演だろう。この《カルメン》も、青森、宮城、千葉など、全国で上演された。オペラの代名詞のようにポピュラーな《カルメン》が、各地で好評を博したのだった。

マリボール歌劇場の秋の日本公演は《ア

アイダ》だった。なるほど1回に1作品を上演し、それをもう1回行なう、という方式は効果的なものかもしれない。10～11月に、やはり日本各地で、《アイダ》が上演された。

東欧の小都市の歌劇場の公演と、軽く見ることはできない《アイダ》だった。タイトル・ロールを歌ったのは、マリア・グレギーナやフィオレンツァ・チェドリンズで、たとえ最盛期は過ぎていても、一流のドラマティック・ソプラノで、実力は十分だった。そして脇を固める歌手たちの水準も決して低くない。世界の最先端をゆく舞台ではもちろんないのだが、それが全国の、日常的にオペラに親しんでいるわけではない観客に向いているという面もある。マリボール歌劇場の2回の公演は、目的を達したのではないだろうか。

12月にはスロヴェニアよりもさらに東の、そして世界中の注目を集める国から、オペラの来日公演があった。旧ソ連、旧ロシア、そして現ウクライナ的首都キエフの歌劇場は、これまで何度も来日公演を重ねている。2014年の公演は、これまでも増してポピュラーな、《トゥーランドット》と《アイダ》の2演目だった。マリボール歌劇場同様、こちらでも上演は全国で行われた。

マリボール歌劇場が人気のある歌手を補強して公演したのに比べ、キエフのオペラはこれまで通りこの歌劇場のアンサンブルによる上演だった。すぐれた歌手を輩出しているウクライナだが、少し前まではロシアの歌手ということになっていた。改めてウクライナの歌手となり、歌劇場そのものも、「ウクライナ問題」が進行中の時の日本公演となった。しかしそうした背景は、《トゥーランドット》や《アイダ》に足を運んだ日本のオペラ・ファンにとっては、大きな比重を占めなかったようだ。そして《アイダ》も《トゥーランドット》も、西ヨーロッパやアメリカのオ

ペラ上演とは一味違うものとして、受け入れられたのだった。

2014年の海外歌劇場日本公演は、東日本大震災の影響がまだ続いているのか、数の上でも質の上でも、地味だった。目立ったのはローマ歌劇場とリヨン歌劇場だったが、ミラノのスカラ座やウィーン国立歌劇場、あるいはニューヨークのメトロポリタン歌劇場といった世界のトップ・クラスの歌劇場とは、やはりランクが違う。だが、それだからこそその魅力も味わえた。のちに失速するとはいえ、来日公演を行なった時のローマ歌劇場は、イタリアで一番勢いのある歌劇場だった。ドイツやフランスとは異なる、イタリア・オペラの伝統にそった上演に、日本のファンは接することができたのだった。

リヨン歌劇場も、フランス有数の歌劇場とはいえ、パリ・オペラ座に較べると大分規模は小さい。だがこの歌劇場は個性的な上演で定評があり、《ホフマン物語》も、ほかとは違う洗練された上演が紹介された。ローマもリヨンも指揮者が中心となっていたところが興味深い、はっきりとした方向性を持った歌劇場の上演が、味わえたことになる。

マリボール歌劇場とキエフ歌劇場は、同じ海外歌劇場の日本公演でも、かなりタイプが違う。ローマ歌劇場とリヨン歌劇場が東京だけで公演したのに対し、マリボール歌劇場とキエフ歌劇場は、全国津々浦々とまではいかないが、日本各地で公演を行なっている。地方在住の人にとって、実際に接するオペラの舞台は、新国立劇場でも二期会でも、ローマ歌劇場でもリヨン歌劇場でもなく、スロヴェニアのマリボール歌劇場やウクライナのキエフ歌劇場の公演ということになる。

ソ連崩壊直後から、東欧系の歌劇場の日本公演は盛んで、当初西欧の一流歌劇場に較べると、上演の水準は大変低かった。しかし最

近は東欧諸国の歌劇場の上演が西欧の上演に近づいた上、日本での公演用に舞台を工夫したり、スター歌手を加えたりするようになって、大きく変った。それでも保守的な傾向は明らかなのだが、そこもオペラの初心者向きであると、考えられているのだろう。いずれにせよキエフやマリボールに限らず、旧東欧系のオペラは、日本のオペラ上演と愛好者の形成に、少なからぬ影響を与えている。

■ オペラ上演の世界化

新国立劇場が2014年に上演した10のオペラ(《カヴァレリア・ルスティカーナ》と《道化師》を1つとして)のうち、少なくとも半数が、共同制作あるいはすでにどこかの歌劇場で上演されたプロダクションだった。東京二期会が上演した4つのオペラのうち、2つがすでにどこかの国で上演されたプロダクションだった。

日本の歌劇場・歌劇団が特別なわけではない。世界中で「共同制作」が増えている。以前は2つか3つの歌劇場が共同して制作する例が多かったが、現在では加わる歌劇場の数も方法も、多様化している。当初から順番が決まっている場合もあれば、後で参加するところがあって、上演する劇場が増える例もある。演出だけでなく、指揮者や歌手が動く例があれば、舞台装置と演出プランだけが移る例もある。

かつて有力な歌劇場は独自に制作するのが普通だったが、いまではニューヨークのメトロポリタン・オペラやミラノ・スカラ座のような歌劇場でも、独自に制作し、その歌劇場でだけ上演するプロダクションのほうが、いわゆる共同制作よりも少なくなっている。

オペラ制作の世界化の動きは年を追うごとに進み、日本も例外ではなくなってきた。オペラを演出や舞台美術からだけ見るわけには

いかないが、制作されたオペラ上演を、一種の作品としてとらえることが自然になってきている。エクス・アン・プロヴァンスで上演された故パトリス・シェロー演出のヤナーチェク《死者の家から》は、当初から英国ロイヤル・オペラなどいくつかの歌劇場での上演が決っていたが、最初の上演の後、続く歌劇場が増えた。すぐれた舞台として認められ、各地・各国で上演される「名作」になったわけだ。新国立歌劇場で3月に上演された《死の都》は、ヘルシンキのフィンランド国立歌劇場のカスパー・ホルテン演出の舞台だった。

これは一方では上演されるオペラの都市ごとの違いが少なくなり、多様性の減少という面を持つのだが、一方では世界のオペラ上演の、相互交流による水準の向上ももたらす。オペラを楽しむ聴衆にとっては、かつてはパリやミラノやウィーンのような限られた都市でだけ享受されていた高度なオペラを愉しむ機会が広がったことを意味する。

「共同制作」の拡大は、協力関係と同時に競争関係も生んだ。ロンドンとミラノ、ベルリンとニューヨークは、それぞれ異なるオペラの伝統を持っているが、上演の質や水準が近づくとともに、ライバルとしての面が現われるようになっていく。

世界の一流歌劇場の力は、伝統や予算、そして運営の中心である総監督、あるいは総支配人の力量に左右されることが顕著になってきた。2014年には、主要劇場の総監督の去就がさまざまに注目された。最も成功したと見られているのは、就任8年を迎えたニューヨーク、メトロポリタン歌劇場のピーター・ゲルブだろう。パリのオペラ座はミラノのスカラ座から移ったシュテファン・リスナーのもとで新しい時代を迎えた。スカラ座はチューリヒで成功し、ザルツブルク音楽祭で

も成果を挙げたアレクサンドル・ペレイラが、スキャンダルで一時は任期の大幅圧縮が伝えられたものの、結局予定通りの着任が決った。ウィーン国立歌劇場は、ドミニク・マイヤー総監督とフランツ・ウェルザー＝メスト音楽監督の体制で新シーズンを迎えたが、結局両者が決裂して多難な2014/15シーズンを迎えることになってしまった。

新国立劇場は欧米の歌劇場とは異なる体制をとっているし、まだ競争する関係にはなっていないので、各歌劇場の力や体制の変化とは直接の関係はない。だが外国の歌劇場の日本公演は、少なくなったとはいえ行なわれ、オペラ界に影響を与えている。ローマ歌劇場の公演は歓迎され、イタリア・オペラの人気を高めたが、その後危機に陥っている。パリ・オペラ座やウィーン国立歌劇場などの体制の変化は、もう日本のオペラ界とは無関係であるとは考えられなくなってきた。

ウィーンやミラノやパリのオペラ公演は、歌劇場の日本公演で紹介されるだけではない。以前から放送を通じて、決して少なくないオペラの公演が、日本のオペラ・ファンに届けられてきた。年末にFMで放送されているパイロイト音楽祭の公演は恒例になっていて、多くの人に聴かれ、ワーグナー・ファンを育ててきた。NHK・FMではオペラの番組が設けられ、毎週海外の歌劇場のオペラの公演が放送されている。

FM放送にとどまらず、NHKではBSのテレビで、以前よりも減ったものの、海外のオペラの公演をテレビ放送している。その多くが最新の、話題の上演だ。さらにCSやケーブル・テレビで有料で放送されているクラシカ・ジャパンでは、バレエやコンサートに負けないくらい、海外のオペラ公演を放映している。それらはいずれも話題の公演、少なくとも話題になりそうなオペラの公演が取り上

げられている。日本のオペラ・ファンは、演奏だけでなく、演出も含めた最新の上演を、いながらにして味わうことができるということだ。

オペラは何よりも舞台での上演であるのはまちがいないが、現在では舞台上演とテレビ中継の中間的な「ライブビューイング」が、広がりつつある。オペラの上演を中継した映像を、映画館で上映するのだが、すでにいくつかの歌劇場が、ヨーロッパやアメリカだけでなく、日本でもこのライブビューイングを行なっている。パリ・オペラ座はシーズンに3～4のオペラを映画館で上映している。ロンドンのロイヤル・オペラは、文字通りのライブビューイングに近いスタイルで、ロンドンでの上演から間を置かず、1回だけを映画館で上映する。最も大規模にオペラのライブビューイング行なっているのは、やはりニューヨークのメトロポリタン・オペラだ。年間に10本程度のオペラを、ニューヨークでの上演の、大体1ヶ月程度で、日本各地の映画館で上映している。さらに有料テレビでも放送しているので、その影響力は大変大きい。

2014年、つまり2013/14シーズンの後半と2014/15シーズンの前半に、メトロポリタン・オペラがライブビューイングで上映したオペラは、《ファルスタッフ》や《ルサルカ》、《マクベス》や《カルメン》など10作品だった。多くの人がこの上映を見ることで、スター主義とやや保守的で豪華な舞台の、メトロポリタン・オペラ式のオペラ上演が広まっているのは事実だろう。もし現代のオペラ上演を一種の覇権争いとしてとらえるなら、いま優位を占めつつあるのはニューヨークだ。

もうひとつ、インターネットを通じてのオペラも、新しい方法として広まりつつある。ウィーン国立歌劇場など多くの歌劇場が、有料で、あるいは無料で、最新の上演を流すようになっている。